

地域を知ろう(39)

民話・伝説 No.19 十貫坂の話

十貫坂の話

杉並と中野の境に十貫坂という坂があります。

正確に言えば和田一丁目五十七と五十八の間にある坂道で、その坂を下りた所に「十貫坂地藏堂」というお堂がありこの中には、元禄、正徳ごろの庚申塔や、享保の頃の地藏など石仏が地域の達人によって大切に保存されています。

悪疫退治、村民安全のために建てられたこれらの石塔は今も人々の厚い信仰にささえられていのでしう。

お堂の前にはいもききれいな草花が供えられています。

それにしては十貫坂とはちよつと珍しい名まえです。江戸時代にはこの他に市内にと呼ばれる幽霊坂、カッパ坂や気味暗闇坂など九段の悪名は九段の一口坂（坂などとも

呼ばれている所もあります。

「武蔵名所図会」という本によれば次のように書いてあります。

和田村と雑色村の間の小坂なり、七八十年以前、村民道脇の畠畔より村民に入りたる小銭十貫文を掘り出す、



それより坂の名となす。……十貫坂の銭は俗に云う中野長者が埋めしところの銭なるべし」とあり、この本は文政三年（一八二〇年）頃書かれたもので従ってこれより七、八十年前の出来事だったの出来事だ。十貫文は一体いくらか。四

貫文が一両です。から二両半で今の金額にすれば大体二十万円位にあたるでしょう。

この坂の上にはお立場と呼ばれている所があった。江戸時代には、田安の両家が鷹狩を行っていた際の休息所だったといわれています。

又坂の下の和田一丁目あたりはかつて、武州多摩郡和田村字本村といわれていました。一般には「砂利田」とも呼ばれていたそうです。

お地藏さんは十貫文の行えを見ていたかも知れません。